

第10回 シンポジウム「公共人類学と東アジア——日本での経験から」(東アジア人類学研究会、仙人の会と共催)

日時：2013年3月10日

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス 大学院棟（旧92年館）3階301号室

司会：稲澤努（東北大学）

趣旨説明：河合洋尚（国立民族学博物館）「公共人類学について」

発表1. 曾士才（法政大学教授）

題目：「公共人類学について考えたこと—日本華僑社会における歴史と文化の再構築にかかわった経験から」

発表2. 内尾太一（東京大学、NPO法人「人間の安全保障」フォーラム事務局長）

題目：「東日本大震災の公共人類学的研究に向けて—宮城県被災地での調査と支援の経験から」

発表3. 川口幸大（東北大学准教授）、白土充良（日中韓サロン）

題目：「市民と人類学との協働の可能性—日中韓サロン（仙台）との関わりから」

コメンテーター：丹羽朋子（東京大学）

人類学的な知識や手法を公共社会に理解してもらいネットワークや場をいかにつくるか。あるいは、人類学者はいかに公共社会に関わるべきか。このような問いに対し、本研究会は日本社会における経験をもって、これらの問題を提起することを目的に「公共人類学と東アジア—日本での経験から」と題して開催されたものである。

曾士才氏(法政大学)は、自らもその一員であり、研究者としても関わってきた日本の華僑社会が、たんなる研究対象から研究主体へと変化しつつあることを報告した。内尾太一(東京大学)は、東日本大震災の被災地支援というフィールドでの参与観察の経験から、人類学の市民社会との共同の可能性について述べた。川口幸大(東北大学)と白土充良(日中韓サロン)は、仙台における研究者と市民団体との共同作業の過程と今後の構想が述べられた。そのうえで白土氏から、市民活動をしている側は、研究者や学生(特に留学生)との対話や、異文化理解を深めるための本や研究者の紹介を望んでいることが発表された。